第58回「おかねの作文」コンクール

特選　金融担当大臣賞

ありがとうの循環

京都府・洛星中学校　1年　足立　悠貴

　僕の母は、小学校一年生の時に父親を亡くし、母子家庭で育った。僕はそのころのことをよく知らないが、かなり貧しい生活だったらしい。服はお下がりばかりで、外食など夢のまた夢だったと聞く。そのこともあり、母は、今も自分のためにお金を使うことはめったにない。僕のため、父のため、誰かへのプレゼントには惜しみなく使うのに、自分のためとなると、どうしても遠慮してしまうようだ。

　そんな母が、ある日、

「今日は大きな買い物をしたわー。」

と笑顔で帰ってきた時は驚いた。なんと、自分のために4万円もするブラウスを買ってきたのだという。僕は思わず、

「4万!? 高っ！」

と叫んでしまった。ブラウス1枚に4万円は高すぎると思うし、いつもの母なら間違いなくそんな高い買い物はしない。一体何があったのかと不思議に思い聞いてみると、母はこんな話をしてくれた。

　そのブラウスは、スリランカの女性たちがぬっているものだという。ブラウスのブランドを立ち上げたのは、日本人の女性で、母はその会社の想いに感動し、深く共感したそうだ。スリランカの村の女性たちが、子育てをしながら家の中で仕事ができるように考えられた仕組みらしい。村から出られない女性たちが、子供を見ながら家の中でミシンを使って服をぬい、生活費をかせげるようにしているのだ。しかも、ブラウス1枚をたった一人で完成させるという。もし、会社がなくなったとしても、自分で服を作ることができれば、そこからまた、一人でも生計を立てることができる。スリランカの女性たちが技術力を身につけることは、今だけでなく、未来を見すえることにつながる。その話を聞いて、僕は心が温かくなった。

「お金を使うっていうのは、誰かを応援することやねんで。」

©J-FLEC2025

「今日は経済回したわ！」
母はそう言って嬉しそうに笑った。その笑顔は、ただ服を買った嬉しさだけでなく、誰かを応援できたことが嬉しい、僕にはそんな風に思えた。

今まで僕は、お金というものは、自分の欲しいものを買うための道具だと思っていた。他人のためではなく、自分のために使うものとしか考えていなかった。しかし、母の話を聞いて、お金はもっと深い意味があることを知った。お金を使うことで誰かの生活を支えたり、夢を応援したりすることができる。スリランカという遠く離れた国の人たちの暮らしに、僕たちが使ったお金がつながっているなんて、考えたこともなかった。お金を使うことは、社会の経済を動かすことにもなる。母の「経済回したわ！」という響きが、なんだか、かっこよく聞こえた。

また僕は、お金を使うと「減る」というイメージがあったが、最近は少し気持ちが変わってきた。お金を使うことで、自分にも相手にも嬉しい気持ちが生まれる。例えば、お店でごはんを食べた時、僕は美味しくて満足するし、お店の人はお金が入って次につながる。もしかすると、そのお金で家族のためにプレゼントを買ったり、夢のために貯金したりするかもしれない。そう考えると、お金は「ありがとうの循環」なのだと思う。人と人とを感謝でつなぎ、お互いを幸せにしてくれる。

注文してから半年がたった、この七月。母のもとにあのブラウスが届いた。タグの裏には、小さな文字で製作者の女性の名前が書かれていた。僕と母は、その名前を見ながらスリランカに思いを馳せた。どんな暮らしをしているのだろう。どんな気持ちでぬってくれたのだろう。母は、これからきっとこのブラウスを大切にすると思う。そして、スリランカの女性も、自分の仕事に誇りを持ち続けると思う。

お金は流れていく川のようだ。誰かの手から誰かの手へと想いが流れ、その人の人生を少しずつ動かしていく。僕はこれから、自分のためだけでなく、誰かのためにもなるようなお金の使い方をしていきたい。それが、母から教わった「誰かを応援する」ということなのだと思う。

©J-FLEC2025